

## 年頭のご挨拶



島村宜伸会長

新年おめでとうございます。

会員の皆様並びに戦没者慰霊諸団体の皆様には、ご家族共々良いお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、旧年中は、本協議会の活動に多大のご協力、ご支援をいただき心からお礼申し上げます。

今年は、誰よりも国民の安寧と幸福を祈るとともに戦没者に心を寄せてこられた今上天皇が退位され新しい御代

を迎えることとなります。新天皇の御代となりましても国内外情勢が安定し、国民が幸福な生活を過ごせることを祈念します。

昨年を振り返りますと、国際情勢については、朝鮮半島において十年半ぶりに南北首脳会談が開催され、その後更に史上初の米朝首脳会談が実現して、朝鮮半島完全非核化が宣言されましたが、その後の非核化プロセスについては具体化の動きがなく、朝鮮半島を巡る情勢は何ら変化していません。

米国は、トランプ大統領が就任して二年目を迎え、中国に対する関税引き上げ、中距離核戦力全廃条約の離脱交渉等に代表されるように「米国第一主義」の色彩が濃くなりました。

中国は、強固な習近平独裁体制のもと、米国との関税問題については対抗

姿勢を明確にし、一帯一路構想に基づく諸外国への経済支援の活発化、南シナ海軍事拠点の維持強化など、経済力・軍事力を背景とした拡張主義が益々顕著になっております。

我が国自身、周辺情勢に惑わされず、毅然とした自主独立の姿勢を堅持することが今ほど求められている時期は、かつてなかったと考えます。

国内においては、豪雨、台風、地震等大きな災害に見舞われた一年でもありましたが、安倍晋三首相が自由民主党総裁選挙において三選を果たすことにより安定した政権運営がなされ、経済面においても株価、為替が安定し、主要な企業が業績を伸ばした年でもありました。

協議会の活動については、七月七日に例年どおり靖國神社において本協議



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

## 第45号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1  
靖國神社遊就館内・地階

電話：03 (6380) 8943  
FAX：03 (6380) 8952  
[https:// ireikyoku.com](https://ireikyoku.com)  
振替口座 00140-6-334930

編集人 圓 藤 春 喜  
発行人 國 澤 輝 生  
印刷所 シダ印刷株式会社

## 目次

|                  |    |
|------------------|----|
| 年頭のご挨拶（島村宜伸会長）   | 1  |
| 靖國神社新宮司紹介        | 2  |
| 謹賀新年             | 3  |
| ペリリュー島作戦と慰霊（その2） | 4  |
| 北部ソロモンの戦い（その1）   | 8  |
| 硫黄島遺骨収集に参加して     | 12 |
| 事務局からの報告等        | 15 |



靖國大絵馬は、愛知県名古屋市の伊勢絵馬協賛会安田織人氏から御祭神奉霊のため、昭和五三年から毎年奉納いただいているもので、横二・七六m、高さ二・一九mのジャンボ絵馬として新春の靖國の名物となっている。

会と慰霊諸団体が合同で主催し、「平成三十一年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を、二四五名(在宅参拝者を含む)の多数のご参加をいただき、厳粛に執り行いました。ご協力ご支援いただいた会員並びに慰霊諸団体の皆様に厚くお礼申し上げます。

次に戦没者遺骨収集については、「戦没者遺骨収集推進法」に基づき設立された「(一社) 日本戦没者遺骨収集推進協会」(以下推進協会という)の本格的な活動が二年目を迎えました。

当協議会も、慰霊諸団体のご意見をいただきながら、社員団体の一員として推進協会の活動に積極的に提言するとともに慰霊諸団体から遺骨収集活動に参加いただき、異郷の地で帰国を待ちわびておられる一二万余の戦没者が、一日も早く、帰還を果たされるよう尽力しております。

新しい年を迎え、昨年の旧懐とともに、本協議会の使命の重大性と寄せられる期待の大きさに改めて身の引き締まる思いがしております。

平成三十一年の協議会活動ですが、柱の一つであります「戦没者慰霊崇敬思想の普及」については、戦友・遺族の老齢化とともに、我々の先輩が大東亜戦争を戦った意義、その苦闘の歴史、加えて大東亜戦争が果たした歴史的役

割を知らない世代が増えております。今年も引き続きこの世代に焦点を当て、啓蒙活動して参りたいと思っています。

もう一つの柱であります「戦没者慰霊事業の継続」につきましては、例年同様、慰霊諸団体と合同の形で、七月六日に靖國神社において「平成三十一年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を執り行いますので、ご協力ご支援よろしく願ひ致します。

また、戦没者遺骨収集については、推進協会の本格的活動が三年目を迎え、益々の活動が期待されます。当協議会は今後も遺骨収集の抜本的推進に鋭意力を藉すとともに、遺骨収集参加を熱望される慰霊諸団体の会員の皆様のご要望に応えるべく引き続き努力する所存ですので、諸団体におかれましてはご意見、ご要望がありましたらお聞かせ下さい。

旧年を回顧し、新年への思いを記しましたが、私自身これらを思い描きながら、心新たに年頭の靖國神社の神前に額づきたいと思っています。

本年も、ご協力ご支援の程をよろしくお願い申し上げます。

平成三十一年 元旦

公益財団法人

大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸

## 靖國神社新宮司紹介



今般、小堀邦夫宮司が10月31日付けをもって退任され、11月1日を以って山口建史(やまぐちたてぶみ)氏が第13代靖國神社宮司に就任されたので紹介します。

### 山口建史新宮司略歴

昭和23年6月20日生

昭和47年3月 皇學館大学卒業

4月 熱田神宮に奉職、

じ後、神社本庁教学部、山口県神社庁、

神社新報社で勤務

防府天満宮権禰宜を

拝命

昭和57年4月

山口縣護國神社権禰

宜を拝命

昭和59年10月

山口縣護國神社権禰

宜を拝命

昭和60年10月

山口縣護國神社権禰

平成元年7月 神社本庁庶務課長を拝命

その後、財政部長、教化部長、研修所研修室・教務両室長を歴任

平成10年7月 靖國神社禰宜を拝命。

記念事業奉賛準備室長、宣徳部長、総務部長を歴任

平成16年6月 靖國神社権宮司に就任

平成27年6月 靖國神社権宮司退任

同年7月より 学校法人皇學館常務理事



改修中の靖國神社

## 謹賀新年

### 公益財団法人 偕行社

|      |       |
|------|-------|
| 会長   | 志摩 篤  |
| 相談役  | 富澤 暉  |
| 理事長  | 森 勉   |
| 副理事長 | 深山 明敏 |
| 副理事長 | 熊谷 猛  |
| 副理事長 | 白石 一郎 |
| 専務理事 | 奥村 快也 |
| 事務局長 | 山越 孝雄 |

|            |       |
|------------|-------|
| 公益財団法人 水交会 |       |
| 会長         | 齊藤 隆  |
| 副会長        | 吉川 榮治 |
| 理事長        | 赤星 慶治 |
| 専務理事       | 杉本 正彦 |
| 事務局長       | 長谷川 洋 |

### 航空自衛隊退職者団体

#### つばさ会

|      |        |
|------|--------|
| 会長   | 外薗 健一朗 |
| 副会長  | 片岡 晴彦  |
| 副会長  | 溝口 博伸  |
| 副会長  | 戸田 眞一郎 |
| 副会長  | 片山 隆仁  |
| 副会長  | 鹿股 龍一  |
| 専務理事 | 若林 秀男  |

### 公益社団法人 隊友会

|        |        |
|--------|--------|
| 会長     | 藤縄 祐爾  |
| 理事長    | 先崎 一   |
| 常務理事   | 増田 好平  |
| 常務理事   | 吉川 榮治  |
| 常務理事   | 片岡 晴彦  |
| 常務執行役  | 久納 雄二  |
| (総務担当) |        |
| 事務局長   | 植木 美知男 |

### 一般社団法人

#### 日本郷友連盟

|           |       |
|-----------|-------|
| 会長        | 寺島 泰三 |
| 副会長       | 森 勉   |
| 専務理事      | 新井 光雄 |
| 専務理事兼編集長  | 勝木 俊知 |
| 常務理事兼事務局長 | 富田 稔  |
| 常務理事      | 越智 通隆 |
| 理事        | 中村 弘  |

### 公益財団法人

#### 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

|           |       |
|-----------|-------|
| 会長        | 杉山 蕃  |
| 理事長       | 藤田 幸生 |
| 副理事長      | 岩崎 茂  |
| 専務理事兼事務局長 | 石井 光政 |

### 公益財団法人

#### 大東亜戦争全戦没者

#### 慰霊団体協議会

|      |       |
|------|-------|
| 会長   | 島村 宜伸 |
| 理事長  | 柚木 文夫 |
| 専務理事 | 伊藤 隆  |
| 事務局長 | 國澤 輝生 |

### 軍学堂

### 医療法人社団 伍光会

### 特定非営利法人

#### 孫子経営塾

### 同台経済懇話会

### 株式会社 リエイト

### 株式会社 SNA

### 株式会社

### キャリアコンサルティング

### 株式会社 再生日本21

### 株式会社 青林堂

その2 作戦・戦闘

## 一 米軍の作戰目的

米軍によるパラオ攻略が具体化したのは、マッカーサー將軍によるフィリピン攻略が現実味を帯びてからであつた。パラオ諸島がフィリピンへの途上に立ちはだかる障害のように映つた。

したがって、パラオ攻略の目的は「フィリピン南部攻略作戦上の脅威を排除するとともに、その作戦遂行のための支援拠点を設定する」ということになった。

パライオ諸島で主要な島としては、北からバベルダオブ島、コロール島、ペリリュー島、アンガウル島があつたが、このうち攻略目的に合致、即ち航空基地として有効に活用できるペリリュー島とアンガウル島が攻略目標とされた。フィリピン南部のミンダナオ島への上陸は1944（昭和19）年11月15日と定められ、それに先だつてペリリュー島へのの上陸は9月15日、アンガウル島への上陸は9月17日と決定された。

この作戦は「スタイルメイトⅡ」と名付けられ、ブル・ハルゼー提督の第

[illegible]

3艦隊が担当した。総戦力は、艦船約800隻（戦艦14隻、空母16隻、護衛空母20隻、巡洋艦22隻、駆逐艦167隻含む）、航空機約1600機、人員約25万名という、この時点では、太平洋戦域における最大規模の上陸作戦であつた。

そして、ペリリュー島には、第1海

兵師団が、アンガウル島には、第81歩兵師団が強襲上陸することになった。

第1海兵師団は、1943年のガダルカナル戦を戦い抜いた部隊として有名であり、師団長ウィリアム・H・ルパートス少将は、参謀や従軍記者らに「ペリリュー島は2日で占領できる。長くても3日だ」と自信満々で語って

いたと云われている。絶大な航空支援と強力な海軍力を背景とした第1海兵師団(約3万名)が、航空機も艦艇も持たないペリリュー島の日本軍(約1万名)に対してそう思っても不思議ではなかった。

ペリリュー島上陸作戦は、昭和19年

**図2**

**戦闘経過要図**

付近に転進させ、じ後の行動を準備させた。また北地区のガラカヨ、ルビー等の離島監視警戒隊を撤収せると共に、機秘密書類の処置等を実施し、激撃態勢を完成した。

四 各地区の作戦・戦闘

(一) 水際付近における作戦・戦闘

(㊦)(2)

米軍は9月15日早朝、第1海兵師団の3個海兵連隊を並列してペリリュー島南西海岸（西浜）に強襲上陸を敢行した。上陸用舟艇は約300隻にのぼり、横広の隊形をもって7時30分ごろリーフに接近した。雲は高く波は穏やかであった。水際陣地守備部隊は至近距離で側火力の集中射撃を開始、そ

の第一波を撃破し、上陸用舟艇60数隻、  
シンヤーマン戦車3両、水陸両用車26両  
を破壊し、兵員約1千余名に損害を与  
えたが、雲霞の如く押し寄せる後続波  
には抗しえず海岸に地歩を与えてしま  
つた。

(二) 飛行場付近の作戦・戦闘  
飛行場南西端付近に上陸した米海兵

第5連隊主力は、戦車随伴で地歩を拡大し、上陸当日中に飛行場南東端付近まで進出するに至った。ここにおいて中川大佐は、作戰計画に基づき15日夕刻、戦車を増強した第1大隊基幹（大隊長市岡英衛大尉）をもって飛行場北側付近から「アヤメ陣地」方向に対し反撃を開始した。その一部は海岸近くまで楔入したが、米軍も既に対反撃準備を固めていたため攻撃は不成功に終わった。この攻撃に参加した第14師団戦車隊（隊長天野国臣大尉）の95式軽戦車は17両であり、総て擱座したが、そのうちの1両が今も旧滑走路跡に残り、ペリリュー島戦跡の象徴となっていることは皮肉である。

9月16日朝から米海兵隊は、艦砲・航空支援のもとに主力をもって飛行場北方地区に、一部をもって南島半島方向に攻撃前進を再開した。これに対し、わが方は砲兵火力等を集中し、多大の損害を与えたが、米軍は飛行場北方建造物付近まで進出し、激しい戦闘が続いた。

### (三) 南地区の作戦・戦闘

南地区隊である高崎歩兵第15連隊第3大隊基幹（大隊長千明（ちぎら）武久大尉）でも15日夜に挺進夜襲を実施した。しかし、徹底的成果を収めることなく千明大隊長は戦死し、大隊の損害も6割を越えてしまった。指揮を継承した第7中隊長奥住榮一中尉は、南地区占領を企図する米第7海兵連隊の猛攻に対し、既設陣地、地雷等の障害を利用して歩兵第15連隊の名譽にかけ勇戦敢闘したが、依るべき地形も無く衆寡敵せず9月18日昼すぎ玉砕した。

ペリリュー島で死闘が続く9月22日（上陸後1週間目）、パラオ本島の第14師団長（パラオ地区集団長）井上貞衛（さだえ）中将は、「米軍はわがペリリュー守備隊の勇戦により疲労困憊しており、あと一押しで米軍を陸岸から駆逐することも可能である」と判断し、高崎歩兵第15連隊に対し、1個大隊によるペリリュー島への逆上陸決行を命じた。

### (四) 飯田大隊の逆上陸

元来同連隊（連隊長福井義介大佐）は海上機動部隊としての訓練を実施済みであり、なかでも第2大隊長飯田義榮少佐は歩兵第2連隊出身で同連隊の将兵に信望があつたなどの理由で逆上陸部隊に起用された。

まず、その先遣隊（村堀利榮中尉指揮の第5中隊基幹、約200名）は9月22日パラオ本島を発航、23日早朝にペリリュー島北棧橋に達着、上陸に成功した。米軍機の攻撃を受け若干の損害を出したが、中川地区隊長の指揮下に入った。

引き続き23日夜発航した飯田大隊主力約830名は、待ち受けていた米艦艇群の中を強行突破し、多大の損害を出したが約半数がペリリュー島に辿り着き守備隊に合流した。

大きな代償を出しての逆上陸であつたが、ペリリュー島守備隊にとつては千天（かんてん）の慈雨（じう）であつた。孤立無援の部隊にとつて、増援部隊の存在ほど心強いものはない。戦国時代の籠城戦において、後詰め（救援部隊）の存在が籠城期間を左右したことからその重要性が分かる。この逆上陸作戦は、発動時期に関して遅きに失したという批判もあるが、中川守備隊の74日間に及ぶ持久作戦に与えた影響は計り知れないものがある。

飯田大隊長の戦死は11月22日とされるので、文字通り逆上陸部隊は、最後の最後まで戦つたことになる。

### (五) 北地区の作戦・戦闘

ほぼ時を同じくして、北地区での戦闘が、9月23日夜、ガリキヨク南方において始まった。北地区隊は、パラオに滞留していた第57兵站警備隊（第8方面軍の兵站中継部隊）を改編した独立歩兵第346大隊（引野通廣少佐以下556名）基幹であつたが、水戸山中の地下洞窟陣地（現在も千人洞窟

として残っている）を固守し、逆襲を反復して、歩兵第2連隊に負けず劣らずの勇戦を10月2日まで展開した。

### (六) 中央高地複郭陣地の作戦・戦闘

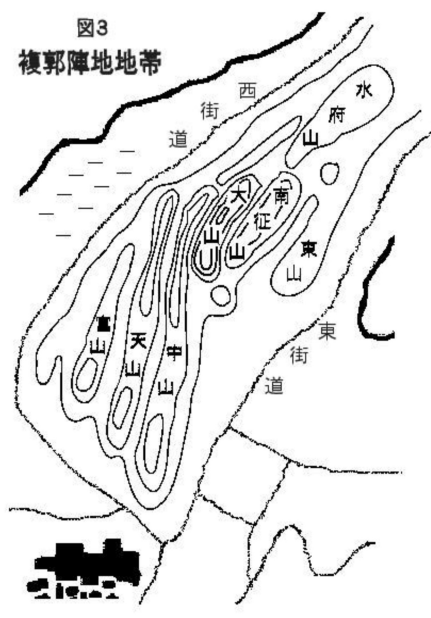
(図 3)

前編でも述べたが、ペリリュー島における対上陸作戦上の特性は、サイパン島などで採られた水際撃滅一辺倒主義ではなく、水際撃滅を追及するが、不成功の場合はあらかじめ準備した複郭陣地に籠つて長期持久戦を行い、次いで遊撃戦闘に移行するという柔軟かつ縦深性ある作戦であつた。

複郭陣地とは、今で云う「最終確保地域」のことであり、島嶼戦においては全周防衛をとることが多い。ここでは、主として大山を中核とした水府山、南征山一帯を指す。この一帯には多くの自然洞窟、断崖、絶壁、峡谷、亀裂などがあり、近接戦闘を得意とする我が守備隊の防御に適した土俵であつた。

米軍による複郭陣地への本格的な攻撃は、上陸後2週間が経過した10月1日になってからであつた。守備隊は、洞窟を拠点として少人数による切り込みや、肉攻によつて強靱な戦闘を行い米軍戦力の消耗を図つた。米軍は、艦砲射撃や航空攻撃、更にはナバーム弾などで高地一帯を焦土化し、戦車が入れない谷地には、棒の先で砂囊（さの

図3  
複郭陣地地帯



(師団長ホール・J・ミューラー少将)であった。約1ヶ月半の戦闘で、同師団が被った損害は、死傷者約1700名であり、アンガウル島の損害(約1600余名)を上回った。とんだ災難であったに違いない。

ラワガシユウダンノケントウライノル」を打電したのち中川大佐(戦死後中将)及び第14師団司令部付村井少将(戦死後中将)は自決した。生存者は歩兵第2連隊副官根本甲子郎大尉の指揮下に遊撃隊を編成(56名)し、遊撃戦闘に移った。

米海兵隊戦史「ペリリュー襲撃」によれば、米第81歩兵師団(第322歩兵連隊欠)は11月25日から包囲圏の圧縮を図った。根本遊撃隊は米軍の包囲網を突破することができず、24日夜から27日11時ごろまで米軍と戦闘を交えたが、ほとんど戦死したようである。

うを推進しながら匍匐前進し、守備隊の陣地を一個一個火炎放射器や手榴弾などによって潰していった。

第81師団は、水府山を10月11日、南征山を10月23日に占領し、残るは大山一帯だけであった。ちょうどその頃米軍は、予定を繰り上げて10月20日、フィリピン・レイテ湾に上陸していた。米軍のペリリュー島攻略の目的がフィリピン上陸の足場作り(航空基地獲得)であったわけだから、この時点で、ペリリュー島の価値は消滅したことになるが、それでも戦いは続いた。

また遊撃隊に参加できなかった重軽傷者も、27日11時ごろまでに大山周辺の残存拠点を固守して遂に玉砕した。

米軍は27日7時から全地区の掃蕩攻撃を開始し、同日11時、第323歩兵連隊長ワトソン大佐は第81歩兵師団長ミューラー少将にペリリュー作戦の終結を報告した。

このような戦いであったため、米第1海兵師団は消耗し、任務途中での部隊交代を余儀なくされた。戦闘力を失った第1海兵連隊は10月2日に、第5、第7海兵連隊は15日以降、ペリリュー島を離れた。死傷者は6500名に上り、師団長ルパート少将は任を解かれた後、4ヶ月後に心臓発作で亡くなっている。こういった事実、海兵隊にとって名誉なことではなかった。

最後の大山一帯での最終戦闘は、1ヶ月以上続いた。特に「死の谷」と呼ばれる溪谷での戦闘は熾烈を極めた。11月24日の決別電報「サクラサクラサク

ラワガシユウダンノケントウライノル」を打電したのち中川大佐(戦死後中将)及び第14師団司令部付村井少将(戦死後中将)は自決した。生存者は歩兵第2連隊副官根本甲子郎大尉の指揮下に遊撃隊を編成(56名)し、遊撃戦闘に移った。

米海兵隊戦史「ペリリュー襲撃」によれば、米第81歩兵師団(第322歩兵連隊欠)は11月25日から包囲圏の圧縮を図った。根本遊撃隊は米軍の包囲網を突破することができず、24日夜から27日11時ごろまで米軍と戦闘を交えたが、ほとんど戦死したようである。

このように、複郭陣地への攻撃を引き継いだのは、アンガウル島を攻略し終わったばかりの米陸軍の第81歩兵師団

最後の大山一帯での最終戦闘は、1ヶ月以上続いた。特に「死の谷」と呼ばれる溪谷での戦闘は熾烈を極めた。11月24日の決別電報「サクラサクラサク

力に玉砕した。それを知った北部天山の第2大隊残余は計画通り遊撃戦闘に移転した。昭和20年5月からは富山西方湿地帯の天然洞窟等を拠点とし、2年6ヶ月にわたって遊撃戦を継続した。最終的に生き残った第6中隊第2小

隊長の山口永少尉以下34名(陸軍22名、海軍8名、軍属4名)は、昭和22年4月21日、元海軍第4艦隊参謀長澄川道男少将の勧告に応じ、米軍との停戦に応じた。戦後、この34名で歩兵第2連隊の編成地である水戸市に因んで三十四(みとし)会を結成している。

実質的に、複郭陣地への攻撃を引き継いだのは、アンガウル島を攻略し終わったばかりの米陸軍の第81歩兵師団

最後の大山一帯での最終戦闘は、1ヶ月以上続いた。特に「死の谷」と呼ばれる溪谷での戦闘は熾烈を極めた。11月24日の決別電報「サクラサクラサク

力に玉砕した。それを知った北部天山の第2大隊残余は計画通り遊撃戦闘に移転した。昭和20年5月からは富山西方湿地帯の天然洞窟等を拠点とし、2年6ヶ月にわたって遊撃戦を継続した。最終的に生き残った第6中隊第2小

本稿は、主として、戦史叢書「中部太平洋陸軍作戦2」を参考とした。

## 五 彼我の損耗(戦死者のみ)

|         |        |
|---------|--------|
| 日本軍     |        |
| 陸軍      | 6632名  |
| 海軍      | 3390名  |
| 合計      | 10022名 |
| 米軍      |        |
| 第1海兵師団  | 1250名  |
| 第81歩兵師団 | 276名   |
| 海軍      | 158名   |
| 合計      | 1684名  |

## 六 まとめ

ペリリュー島のわが守備部隊は、周到な作戦準備と陰険な地形を利用して2カ月半にわたる勇戦敢闘を続け、この間昭和天皇から11度に及ぶ御嘉賞を賜り、わが国戦史に異彩を放った。

ここでの戦訓は、じ後の硫黄島戦等で遺憾なく活用され、米軍を大いに苦しめることになった。(続く)

## 北部ソロモンの戦い

### その1

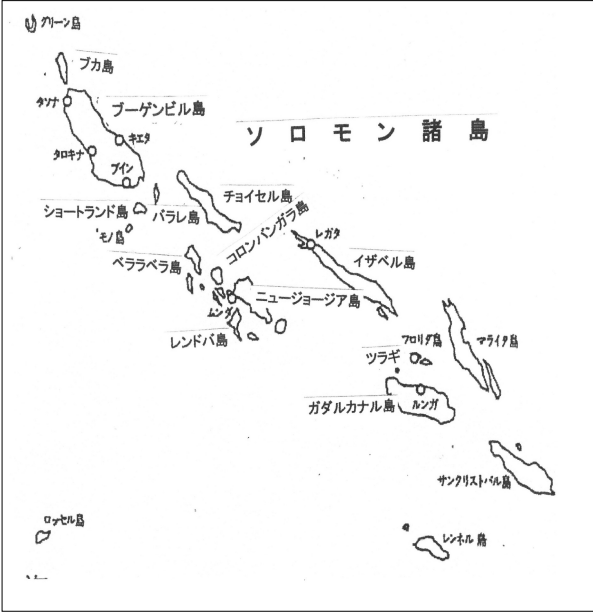
岩田 司朗

#### ○はじめに

大東亜戦争開始以来、各戦場で破竹の進撃を続けていた陸軍部隊は、昭和18年2月、ガダルカナル島奪回作戦に失敗し同島から撤退、その後、東部ニューギニア、中部ソロモン、北部ソロモン方面で、過酷な戦闘を強要されていた。

このような戦況のなかで、各部隊の兵員が平均二分の一から三分の一程度に減少し、師団長をして「軍紀も勅諭も戦陣訓も百万遍の精神訓話も、飢の前には全然無価値であった」と云わしめるような極限状況のもと、「墓島」(示島)と称された「ブーゲンビル島」(注：当時、同島はボーゲンビル島と呼ばれていた。)を中心とする北部ソロモン諸島において遂行された作戦・戦闘の概要を紹介する。

#### 一 ガ島撤退後のソロモン方面の全般状況



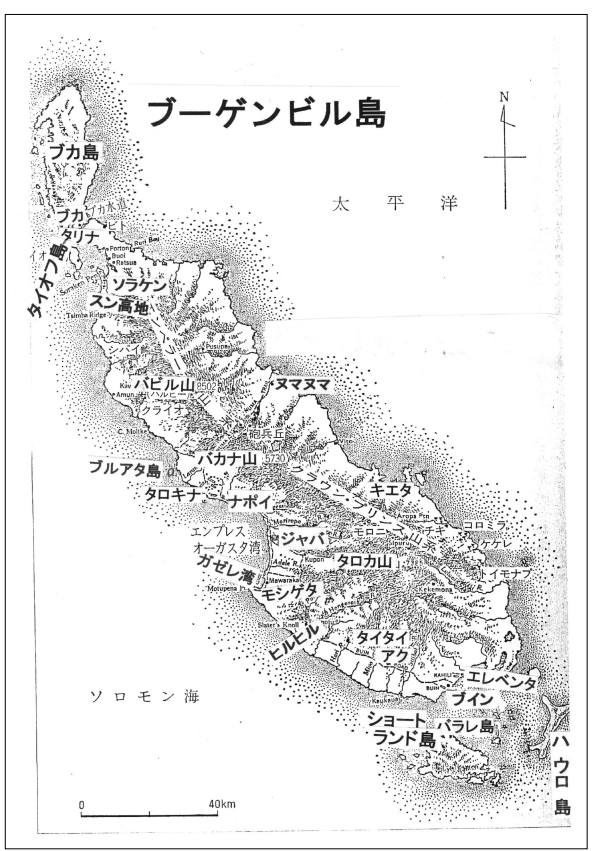
ガ島撤退後、ソロモンの戦場での日本軍の第一線は、中部ソロモンのニュージョージア島周辺となった。日本軍はここに歩兵約5コ大隊を基幹とする陸軍南東支隊(長 佐々木登少将)と、海軍第8連合特別陸戦隊(長 太田實少将)を配した。陸海軍中央協定により中部ソロモンは海軍、北部ソロモンは陸軍とその防衛担

任を定められたので、南東支隊は在ブインの第8艦隊の指揮下に入った。

これに対して連合軍側は、昭和18年6月30日、中部ソロモン「レンドバ島」と東部ニューギニア「ナツソウ湾」の両方面一斉に上陸作戦を実施して、ラバウルを目標とする大攻勢の火ぶたを切った。南東支隊は、ニュージョージア島ムンダ付近で、連合軍の攻勢を迎え撃ち、7月、8月と激戦が展開された。ところが数的に絶対優勢を誇る連合軍は、これら第一線の戦場を迂回して、8月中旬、ベララベラ島の後方要

点に上陸してきた。南東支隊及び海軍諸部隊は、9月28日、10月2日の2回にわたり主力を大発動艇で、まずチョイセル島に輸送し、じ後ブーゲンビル島に撤収し、戦局の焦点は、北部ソロモン、就中、ブーゲンビル島へと移っていった。

#### ニ ブーゲンビル島の地誌



委任統治領、ハウロ島は英国の委任統治領であった。

島のほぼ中央を南北に標高2000～3000mの活火山を含む脊梁山脈が縦走しており、平地は北部のタリナ方面及び南部のモシゲタ、タイタイ、アク、ブイン間の海岸に近く開けているに過ぎない。

島全体は中央山脈から海岸線に至るまで、寸分の余地なくジャングルに覆われている。気候は標準型の熱帯性気候で、年間盛夏である。湿度は年中猛烈に高く、あらゆるものの腐敗は急速に進行した。

なお、昭和18年4月18日、連合艦隊司令長官山本五十六大將は、前線將兵を激励するため、ラバウル基地からブーゲンビル島ブイン基地をへてバラレ島に向かう途中、米陸軍航空機による襲撃を受け、同島上空において撃墜され戦死した。

### 三 絶対国防圏

連合軍の攻勢を受け、昭和18年9月30日の御前会議において、帝国戦目録的達成上絶対確保を要する圏域が設定され、「決戦戦力特に航空戦力を急速に増強し、主動的に対米英戦を遂行」等の戦争指導方針が決定された。

これらの大命を受けて策定された第8方面軍命令に基づいて、第17軍は10

月15日、北部ソロモン諸島防衛のための作戦計画を策定した。

### 1 方針

軍は海軍と密に協力し北部「ソロモン」群島に進攻する敵を邀撃して之を撃滅し以て敵の西南太平洋方面に対する反攻企図を挫折せしむ。

### 2 任務

#### (1) 第6師団

前進拠点として一部を以てチョイセル島西北端付近を確保すると共にガゼレ付近、ショートランド島及びハウロ島に堅固なる攻勢拠点を占領しブーゲンビル島(付近島嶼を含む)西部及び南部を防衛せしむ。作戦地域内の警備に関し海軍と協力し且所在軍直轄部隊を区処せしむ。

#### (2) 第17歩兵団

キエタ付近及びタリナ周辺地区に堅固なる攻勢拠点を占領しブーゲンビル島東部及び北部並びにブカ島(付近島嶼を含む)を防衛せしむ。

### 四 連合軍の北部ソロモンへの進攻

米軍は、ニュージョージア島での戦いで、飛行場奪取を狙って苦戦した経験から、ブーゲンビル島の日本軍飛行場は占領せず、新たな飛行場を建設することとし、地形・地質の調査を行い、飛行場建設地をタロキナに決定した。これに基づき、第1海兵軍団司令部

は、作戦計画を完成し、10月15日、第3海兵師団長にブーゲンビル島上陸に関する本命令を下達した。

#### 1 前哨戦―チョイセル島 モノ島

モノ島(トレジャリー島)に対する作戦目的は、同島の日本軍を撃破し、かつ上陸用舟艇の中継、避難並びに魚雷艇の戦闘参加を可能にするものと定められ、長距離レーダー及び前進海軍基地の建設が計画された。10月27日早朝、ニュージールランド第3師団の第8旅団を基幹とする部隊が、モノ島に上陸を開始した。米軍の記録では、11月12日までにモノ島の掃蕩を完了、日本軍の戦死者205名、連合

軍側の戦死者52名、負傷者174名とある。

チョイセル島では、歩兵第23連隊 第2大隊(長 安部政太郎少佐)を基幹とする部隊が北部サンギガイ付近を警備していた。



海岸の景況



ジャングルの景況

米軍は、予定通り10月27日、チョイセル島サンギガイから8マイル離れたボザに上陸、10月30日、日本軍前哨部隊を駆逐してサンギガイに近接したが、その後、ブーゲンビル本島上陸作戦が順調に進展したので、上級司令部の命により11月4日朝、上陸用舟艇に乘艇して撤収した。

#### 2 タロキナ上陸

当時の連合軍側は、日本軍の配置、地形特にジャングルの状態から日本側がいかにタロキナ方面に防備を固めようとしても、地形に遮られた戦いとなり、かつ兵力も小部隊に制限されることになると判断し

ていた。

11月1日、連合軍の火力支援駆逐艦4隻は、午前5時1分、射撃計画に基づく予定射撃を開始、5時20分から雷撃機31機による海岸線に対する銃爆撃が開始された。

第1次上陸部隊を乗せた上陸用舟艇群の先頭が、ブルアタ島―タロキナ岬に達した時、タロキナ岬とタロキナ島とブルアタ島西端の3か所から機関銃の激しい射撃が始まり、続いて岬の北西肩部から75ミリ山砲(連隊砲)の射撃が開始された。日本軍守備隊は舟艇を4隻撃沈、10隻に被害を与えた。

指揮艇が沈没したので上陸舟艇群は全くの混乱状態に陥り、水際に地歩を占めるまでは上陸部隊の指揮組織は支離滅裂であった。

米側の資料では、ブルアタ島に30名、タロキナ島に7名、タロキナ岬に230名の日本軍が、18個の掩蓋機関銃座を設け交通壕で接続し堅固に守備していたという。

連合軍は上陸第1日の夕刻までに、予定した第1次進出線を占領した。ブルアタ島の掃蕩は第2日一杯かった。

日本軍タロキナ守備隊と司令部との連絡は、午前7時に途絶した。そ

の敢闘も、圧倒的に優勢な連合軍上陸戦力の前には所詮敵すべくもなかった。数名の命令による脱出者と、後方にあつた補給関係者を除いて、全守備隊は任地で玉砕した。

## 五 方面軍の逆上陸部隊準備と中止

第8方面軍は、タロキナ付近への連合軍上陸の報に接し、11月1日午前11時20分、「方面軍は、海軍と協力し『タロキナ』付近に上陸中の敵撃滅を企図し、第17師団歩兵約1個大隊の決死部隊を以て駆逐艦に依り、

本1日夜敵の上陸点付近に逆上陸を敢行せしむ」旨の電報を発した。

この逆上陸部隊を「第2機動決戦隊」と称し、1日午後3時30分ラバウル出航の予定であつたが、出航直前に連合軍機による空襲があり出発が遅れた。

このため、上陸地点に対する達着時間が不適當となり、一時中止となつた。

この逆上陸構想は、余りにも唐突で、現地17軍との調整、敵情、

地形の偵察、部隊側の準備等の面で、その成功の可能性に多大の懸念を持たざるをえず、延期はむしろ幸いであつたと見えよう。

## 六 第6師団の第1次タロキナ作戦

### 1 攻撃部隊の編成、攻撃構想

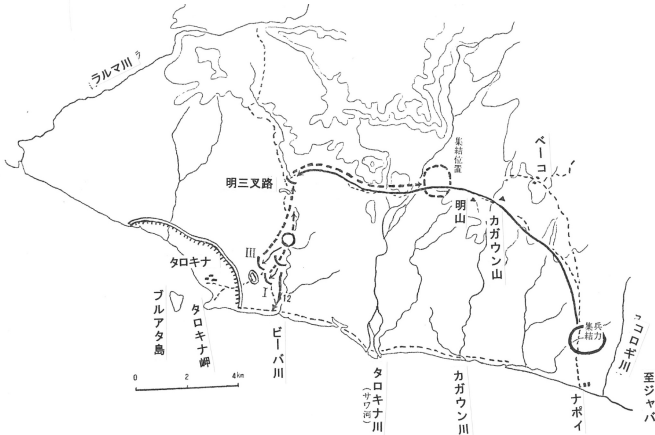
連合軍のタロキナ上陸の報告を受けた第6師団長神田正種中将は、「反撃するとすれば、早急にやる方が小兵力で効果が収め易い。」と判断し、西地

区警備隊(歩兵第23連隊基幹、連隊長(濱之上大佐)に対し、「なるべく多くの兵力を結集のうえ、タロキナ岬に上陸せる敵米軍をタロキナ岬より撃壊すべし」との攻撃命令を下達した。

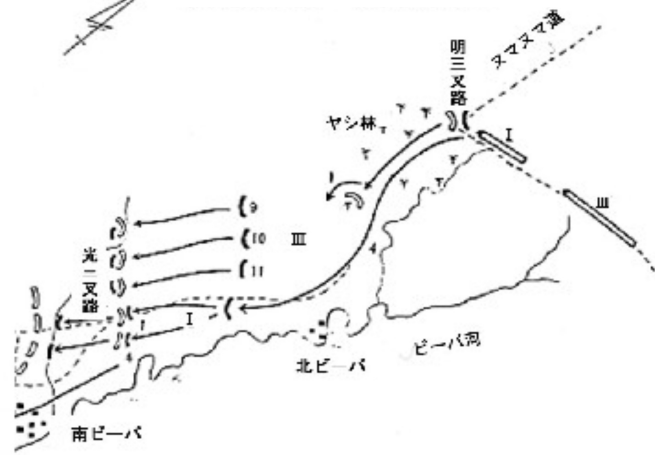
当時、ジャバ南方の密林内に終結し得た部隊は、3個大隊基幹の戦闘要員1240名、補給担任の約1000名の輜重兵、合計2240名であつた。

### 2 濱之上部隊の攻撃前進

第1次タロキナ作戦(歩兵23連隊の攻撃)



第1次タロキナ作戦経過要図



11月6日午後6時、集結を終わった濱之上部隊は、夜間機動を開始した。タロキナへの道路はなく、小河川や湿地帯は、腰まで水につかって前進、7日朝、前衛の第1大隊がビーバ川河岸に進出した。

その後、引き続き前進し、7日夕刻までに高千穂道とミツシヨン道との交差点北側まで進出、米軍の偵察警戒部隊に対し攻撃を開始した。

戦闘が激烈となったので、米軍は更に兵力を増強するとともに、迫撃砲で猛烈な集中射撃を実施した。

### 3 11月8日の状況

部隊は天明までに攻撃準備を終わり、午前8時に攻撃前進を開始した。

午前11時頃、連隊長は第一線に2コ大隊を展開する決心をし、第1大隊左第一線、第3大隊右第一線、第7中隊予備隊という本格的攻撃部署をとった。連隊長は攻撃の重点を左と示し攻撃を続行したが、戦況は進展しなかった。

連隊長は、「自ら予備隊(第7中隊)を率いて前進困難な最大の原因である敵の迫撃砲陣地を夜襲する」という決心のもと、第一線大隊の中間から米軍迫撃砲部隊に向かって、1時間ほど前進したが、途中から湿地地に入った模様で、腰まで水に漬かって前進するが、行けども行けども湿地の連続であった。

午後8時を過ぎたころ、連隊長は停止を命じ、引き返す決心をした。

帰還した連隊長は、9日払暁、依然重点を左に保持して攻撃を再興する命令を下達した。

### 4 濱之上連隊の後退

部隊は、8日夜は一睡もできなかったが、9日午前8時30分、予定どおり昨日の態勢をもって攻撃を再興した。

敵迫撃砲の集中射撃はその勢いを増し、綿密な地形測量と計画により、至短時間に数百発の砲弾を撃ち込み、鼠1匹と雖も生存しえないような猛射を繰り返してきた。

9時30分頃、第1大隊から「敵迫の集中射撃により第一線は重大な損害を受けつつあり」との報告が入った。

弾薬は7日以来1回も補充していないう。而も今日までの戦闘の経過を見れば敵弾と我との比は、150対1位となっていた。人間の多寡は余り問題ではないが、この火力の差は如何とすべからざるものがあるとみて、濱之上大佐は後退を決心し、敵迫撃砲の最大有効射程外(左後方コロギ川渡河点付近)に兵力を集結し、じ後の攻撃を準備する旨の後退命令を下達した。

部隊の後退行動は順調で、おおむね12時頃所定の位置に集結を終わった。

この攻撃部隊の後退問題に対する関係方面の反響は、おおむね不評であった。師団から大本営に至るまで関係者は、この決心、行動について否定的な見解であったと回想している。

11月10日までに報告された、第1次タロキナ作戦による連隊の損害は、次のとおりである。

|      | 将校 | 下士官兵 |
|------|----|------|
| 戦死   | 5  | 104  |
| 戦傷   | 10 | 183  |
| 生死不明 | 15 | 48   |
| 計    | 33 | 335  |

### 七 第2剣部隊の逆上陸

第8方面軍は、濱ノ上連隊の攻撃に連携し、1日に一旦中止した第2機動決戦隊(第2剣部隊)のタロキナ付近への逆上陸を再興することに決し、三輪少佐の指揮する第2剣部隊の大隊主力を7日午前3時〜4時の間に、ラルマ川東岸地区に達着させた。

上陸した第2剣部隊は、小迂回、浸透攻撃を実施したが、米軍は、砲兵による猛烈な射撃を終夜にわたり実施すると共に、8日には、軽戦車で増強された海兵2コ中隊を第一線に展開し、反撃を開始した。米軍の攻撃に対し、日本軍の抵抗は全く無く、戦場は静寂に蔽われていたという。

その後、第2剣部隊は、17日昼頃第23連隊本部に到着し合流するが、米軍

の記録によれば、参加人員877名に対し300名を超える戦死者を出した。

### 八 ブーゲンビル島沖航空戦

歩兵第23連隊を基幹とする地上部隊の攻撃と、第2剣部隊による逆上陸戦闘が、タロキナの連合軍橋頭堡に対して行われている頃、海軍航空部隊が数次にわたって航空戦を展開した。

この航空戦は回数にして6回、期的には11月5日から12月3日にわたるものである。これらの航空戦が、その激烈さにおいて特筆すべきものであるばかりでなく、戦果の判定とその影響は、陸軍側の戦闘指導、作戦指導に大きな影響を与えた。

これらの航空戦においては、陸上・海上攻撃機、艦上爆撃機等延べ354機による攻撃が行われ、撃沈或は沈没として大本営に報告され、発表された戦果の合計数は、大型又は中型空母×8隻、巡洋艦×11隻、駆逐艦×5隻、戦艦×5隻、輸送船×6隻である。

しかし、戦後の米国海軍作戦年誌によれば、同時期における損害は、魚雷艇1隻、軽巡洋艦2隻、上陸作戦用輸送艦2隻のみとなっている。

### 九 ナボイの殲滅戦

11月下旬、タロキナ橋頭堡の米海兵隊は、陸軍1コ師団の増援を得た。当時、米側の関心は現在接触中の日

本軍歩兵第23連隊に対する増援であり、このための対策を重視した。

米軍は、日本軍の交通連絡の分断、諸施設・軍需品の破壊、情報の収集等の目的を推進するため、日本軍の兵力配置について詳細な情報のないまま、襲撃部隊を計画どおり29日午前2時、ナポイ北方海岸に上陸させたが、そこは日本軍の大集積所の真只中であつた。午前4時頃日本軍の攻撃が開始された。夜が明けると益々射撃が激しくなり、襲撃隊指揮官は部隊の退却を要請した。この状況を承知した米師団長は、直ちに要請に応ずる処置をとつたが、その救出部隊が2度接岸を試みたものの、その都度日本軍に撃退された。午後5時、第3回目の救出部隊の接岸が、奇跡的に日本側の反撃を受けることなく成功し、午後6時40分、救出部隊は離岸した。この間、艦砲は間断なく射撃し、飛行機が断続的な支援を行った。

この戦闘の戦果に関する日本側の公電には、「岩佐支隊は29日15時ナポイ付近に上陸せる敵を海岸に於いて殲滅せり」(11月30日0613発)とある。

(続く)

## 硫黄島遺骨収集に参加して

榎本 眞己

(偕行社71期、防大15期)

### 一 はじめに

今年の6月27日から7月11日まで、一般社団法人「日本戦没者遺骨収集推進協会」が行つた平成30年度の硫黄島戦没者遺骨収集(第1回収集)に参加しました。今回の派遣団員は総員35名です。この35名が額に汗しつつ遺骨収集活動を行い、29柱の御遺骨を収容しました。

遺骨収集を行つて改めて当時の将兵のご苦労を身をもって体感し、73年もの前の遺骨を今になつてもなお収容している現状を残念に思いました。そこで遺骨収集の現状と遺骨収集をしながら考えさせられたこと等について述べたいと思います。

### 二 遺骨収集の現状

#### 【遺骨収集のメンバー】

今回の遺骨収集の参加者は、一般社団法人「戦没者遺骨収集推進協会」から団長を含めた5名、「日本遺族会」から6名、慰霊団体である「硫黄島協会」から6名、「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」から2名(私は偕行

社を通じて本梓で参加)、「水戸二連隊ペリリュー島慰霊会」から2名、遺骨収集のボランティア団体である「JYMA日本青年遺骨収集団」から2名、

「国際ボランティア学生協会(IWSA)」から2名、そして「小笠原村硫黄島旧島民の会」の方が4名、「隊友会」から2名、重機オペレーター3名、小笠原村役場の1名でした。総員は女性5名を含む35名です。この他に陸上自衛隊から不発弾処理要員×2名、化学班(検知)要員×2名に協力いただきました。

#### 【硫黄島への往復と現地活動】

本土(入間基地)と硫黄島の往復は、防衛省の支援を得て航空自衛隊のC-130H(所要時間…2時間40分)を利用しました。C-1は定期航路を運航しており、私共は臨時便ですので、速度の遅いC-130Hを利用せざるを得ないそうです。

派遣期間は6月26日～7月11日(26日は人間での団結式。現地は27日から)の16日間でしたが、到着日及び帰還日等は天山慰霊碑に参拝、日曜日の休養、帰る前の資材整備等を除くと、実質の活動は9日間でした。

宿泊は米軍が夜間離発着訓練を行う際の宿泊施設となる航空自衛隊の隊舎です。また食事は常駐している鹿島建

設の食堂を利用しました。今回滑走路下にある貯水タンクは十分でしたので毎日のシャワー等に影響はありませんでした。

一日の活動はマイクロバスで現地に移動し、午前0740～1040の間の3時間と午後は1340～1540の間の2時間の計5時間です。

#### 【遺骨収集要領】

今回、私どもの遺骨収集派遣団は現地で2個グループに分かれました。私が所属したグループの収集場所は将兵が最後まで抵抗した硫黄島北東部です。

ここは昨年度から継続中の場所です。昨年度は壕の入口から鹿島建設が壕の天井部分を開放するため油圧ドーザーで掘り進めたところ入口から約30mのところまで御遺骨を発見しました。事後、遺骨収集派遣団により手作業で搜索したところ、この地点の近辺で15柱を収容したそうです。

今回の私共の活動は、天井部分を取り除き昨年から新たに壕入口となつた箇所から壕内を搜索することでした。その収集要領は次のようなものです。今年はず壕底を探し出すことから始めました。それは、戦いにより天井が落下したり、あるいは戦後73年の間に硫黄島の隆起(観測を始めて42年間で約10m隆起)等により、壕の天井が

崩落し壕内に堆積しているからであり、当時の将兵が戦われたであろう壕の底がどこかわからないからです。当然のことながら遺骨が出てくる可能性がありますが、この作業は全て手堀です。まず1〜2名で小さなスコップを使って土を掘り、これを簀（みの）ざるに入れます。それを残った隊員が一列に並び、手送りで外に運び出します。壕底は約2 m位掘り下げると固い部分が出てきましたので明瞭に分かりました。御遺骨は地中20〜30 cmから1 m位の間で発見されます。発見すると、以降は丁寧に、丁寧に掘ります。まるで遺跡の発掘作業のようです。御遺骨を発見



壕内掘開土の排出（簀ざるの手渡し）



排土を篩にかけ御遺骨を探索

すると当該地点を記録し、御遺骨と周辺の土を簀ざるに入れます。壕の外に運び出した御遺骨周辺の土は篩（ふるい）にかけ御遺骨の破片を探します。篩にかけた御遺骨の断片と形のある御遺骨は、その後日光で乾かします。次いで女性の方が中心となり御遺骨に付着した土を刷毛で取り除きます。その後、「戦没者遺骨収集推進協会」の方が御遺骨の同じ部分（喉仏、大腿骨、踵等）を探し出し、柱数を確認します。これら御遺骨は毎日、一柱ごとに白い布袋に足の部分から頭骨の方へ順番に入れ、宿舍内の仮安置室に持ち帰りま



収容御遺骨の仮安置

す。またこれらは最終日に厚生労働省の現地事務所内の安置室に奉安しました。これら御遺骨は年度最後の遺骨収集団が千鳥ヶ淵戦没者墓苑まで捧持し、厚生労働省の方にお渡しするそうです。【御遺骨収集のための工夫】発見した御遺骨を取り出そうとする

と、ポロポロと崩れます。このため何回も参加されている遺族会の方等ではできる限り大きな形で掘り出そうと、遺骨を見つけたら極めて慎重に且つ丁寧に自分で工夫したヘラ等を活用しながら掘り出されます。比較的若い遺族会の方が自慢されていたヘラは、たこ焼

きを裏返しにする際に使う千枚通しの先を広げたようなものでした。彼はこれで遺骨の周りの土を掻き出し大きな形で遺骨を取り出します。このような丁寧な活動ですから、実質9日間の今回の収容作業で奥へ掘り進むことができたのは約20 mでした。そして11柱を収容しました。壕の奥まで未だ20 m位あります。しかもその奥と思われる個所には直径50 cm位の穴があり、ひよっとしたら更なる奥があるかも知れません。これらの発掘は次回以降の作業です。

### 三 遺骨収集をしながら考えたこと

#### 【御遺骨と一緒に収容したもの】

壕の入口付近では折り重なるようにした5柱、その奥でややバラバラに6柱を発見しました。御遺骨の他には認識票×2、印鑑×2の他、万年筆、腕時計、米軍の水筒、朽ちた鉄帽、未使用の日本軍の手榴弾×6発、米軍の不発手榴弾×1、錆ついて居る南部式拳銃、木製部分は朽ちてしまったと思われる小銃の薬室、皮の断片（きつと皮の収納ケース）が付着した弾倉や小銃弾を多数、土と混じってしまっている黄色い爆薬等を回収しました。

弾薬類は協力する陸上自衛隊の不発弾処理隊員が回収してくれました。また認識票及び印鑑等は個人を特定でき

る可能性がありますので、発掘した場所を御遺骨の場所とともに記録し回収しました。その他の掘り出した物は埋め戻すそうです。硫黄島ではこのような遺品を収容しては切りがないかなのでしよう。

### 【硫黄島の土壌等】

硫黄島は火山の島ですので、土壌がアルカリ性です。このため遺骨や皮は朽ちているとはいえず未だ残っています。しかし小銃の木製部分は完全に朽ちているように木製品は跡形さえ見えなくなってしまう。インドシナ半島で遺骨収集された方からお聞きしましたが、インドシナ半島の御遺骨はもう朽ちてしまっていて、ほとんどわからなくなっているそうです。

島内では諸所に噴気が出ており、壕内は地熱が高く5分も入って居られない所もあります。しかも島の土壌は砂質粘土が堆積し長年にわたって固く凝固した土丹岩です。固く凝固したといっ

ても、ツルハシを打ち込めば崩れます。ですから壁には兵士の方が苦労されて掘られたツルハシやシャベルの痕が明瞭に残って居ます。このような岩盤のない地層のため、降った雨水は地中に浸透してしまい、地上に湧き出すような箇所は島内には一切ありません。淡水が得られるのは島の東海岸に祠のよ

うな形をした岩があり、その奥に淡水の溜水が唯一一箇所あります。これは銀名水と呼ばれ、海水が地熱により蒸発し、淡水となった水分が岩の祠の底に溜まっているのです。ですから硫黄島では今でも水は貴重です。きつと米軍の水筒は、水に飢えた御遺骨の主が死傷した米兵から命からがら分捕ってきた物なのでしょう。

### 【折り重なった五柱の御遺骨】

小銃は木製部分が朽ち果て、金属の薬室部分だけが残っていました。その薬室には弾薬が装填されたままでした。また手榴弾は、当然のことながら我方は未使用のものばかりです。一方、米軍のもの是不発弾です。きつと投げ込まれたものでしょう。これらのことから亡くなられた将兵の方々は壕内で銃の撃ち合いとなる前に亡くなられたと思われま

す。入り口付近で折り重なったようにした5柱を収容しましたが、このことは亡くなるまでの時間が僅かであったことを物語って居ます。手榴弾では一挙に5人をその場で動けなくするまでに殺傷することは困難です。ということには爆発物により壕内の天井が崩落し動けなくなったか、火炎放射器等により逃げるに逃げられずに酸欠となり亡くられたか、或はひよつとすると覚悟の上で手を取り合いながら餓死されたのかも知れません。

### 【収集しながら考えたこと】

掘り出している間は、全身に汗をかきながら懸命にやっていますので、このようなことを考える余裕はありません。しかし20〜30分おきにとる休憩の時に壕の外に出て涼しい風に触れるとふと考えてしまいます。

将兵は、航空劣勢下、補給も援軍もない孤立無援の中で、瓶や缶で貯水した雨水を飲みながら乏しい糧食で、本土決戦への時間を稼ぐという目的のために戦われたのです。その苦勞、しかも十分な成果を得ずに死ななければならぬ悔しさ等を考えると涙が自然に出てきます。しかも兵の中には、ここが死地とは認識せず、いざれ本土から増援部隊がやってくると信じて亡くなった方もいらつしやつたはず

です。栗林中将も部下将兵全員にここが死地となるとは伝えませんでした。それはきつと全将兵の理解が得られないと考えられたのでしょう。その代わり兵団司令部を設備の整った従来の父島からここ硫黄島に移し、自らここで指揮をとり、全将兵と一緒に死を覚りながら戦われたのです。しかも万歳突撃や自決を強く戒め、努めて長く持久することにより本土決戦への時間を獲得す

るに努められたのです。

### 【あらためて守備隊の覚悟に感動】

考えてみれば、絶対国防圏が破綻した後の戦闘ですから、優勢な米軍を相手に孤立無援の約2万人の硫黄島守備部隊のみで戦って勝てるはずがありません。将兵は必ずこの硫黄島で戦死することが明らかです。これは航空機による特別攻撃隊や戦艦大和の最後の出撃と一緒に。今言うのは結果論であり意味がないことは自明ですが、それでも敢えて言うならば、2万強の将兵の死をもってあがなった米軍による本土攻撃遅延期間はわずか36日です。

『これだけの犠牲を払って』と考えると、悔しくもあり残念でもあり、また涙がこぼれてきます。

遺骨収集しながらこのようなことを考えていると、あらためて亡くなられた将兵の御遺骨が尊い神々しいものに覚え、遺骨が清浄なものと感じられました。

### 四 おわりに

戦争は国家行為です。戦争で亡くなられた方は志願兵であれ、招集兵であれ、国家の命令により戦い戦死されたのです。この戦死した将兵の魂を鎮めることができるのは国家によつてのみ成し得るのです。そうであるならば遺骨収集は国家の責任として取り組まね

ばなりません。しかるに戦後73年も経っているにもかかわらず、未だ御遺骨の「帰還が十分でない」ということは、国家の怠慢以外何物でもありません。しかしその国家の意思は多くの国民の意思に基づいています。ということは進んでいない日本の遺骨収集の問題も、所詮日本国民の遺骨問題に関する意志あるいは無関心が根底にあります。しかも所轄省庁である厚生労働省も積極的にこの活動を国民に啓蒙してきたようには見受けられません。

平成22年の菅政権時に米軍資料を基に硫黄島の遺骨収集を実施したところ、大量の御遺骨を収容できたことを契機として、平成28年に戦後初めて遺骨収集に関する法律が成立し、遺骨収集を専任する法人が立ち上がりました。

何故、今まで米軍資料も調べずに遺骨収集を行ってきたのか？ 何故、今頃になって遺骨収集に関する法律が成立し、専任の法人ができたのか？ という疑問は誰もが思うのではないでしようか。

このような政府（厚生労働省）の消極的ともいえる今までの姿勢が何故かはわかりません。しかし邪推かも知れませんが、次の二点があるのではないかと思います。

一つは「戦争責任」の問題です。遺

骨収集活動を積極的に行うことは、予算を伴うことであり、このことが国内的に「戦争責任」を蒸し返すことにならないかの懸念です。しかもこの問題は極東国際軍事裁判の是非を問ひ、ひいては各国との間で日本が主権を回復する上で締結したサンフランシスコ講和条約第11条 (accepts the judgment of the court) に関連し国際問題となることを内包しています。

そしてもう一つは「魂の慰霊と遺骨の慰霊」の問題です。亡くなられた大東亜戦争の約二百万柱将兵の御霊（みたま）は靖國神社でお祀りしています。遺骨収集を積極的に行うことが約三十六万柱の千鳥ヶ淵戦没者墓苑に焦点を当て、ひいては靖國神社への尊崇を損なうことに繋がらないか、そして戦後GHQによって行われた神道指令により靖國神社と国家とが切り離された状態となっていることが固定化しないかの懸念です。

いずれも私の勝手の邪推で有り、そうでないことを願っています。

時代、時代により制度等の表層的なことは変化し前時代と異なることはありますが、その内実は例え変化したとしても前時代を反映し変化しているのであり、過去を継承したものです。私

どもは自分達の内実の過去を消すことは出来ません。如何なる過去を持つとも、その過去を拭い去ることはできないのです。大切なことは、その過去の歴史から謙虚にどのように学ぶかであり、それを学び得るのが人間の「叡智」というものです。そう考えるなら、現在の平和と繁栄の礎となられた旧軍の将兵の遺骨を海外に放置することは、今を生きる者として恥ずかしいだけでなく、海外の人からも軽侮されるのではないでしようか？

今年の全国戦没者追悼式において天皇陛下は次のようにおっしゃいました。「戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ、ここに過去を顧み、深い反省とともに、今後、戦争の惨禍が再び繰り返されぬことを切に願い、全国民と共に、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります」

私どもは陛下のこのお言葉を噛みしめ、戦陣に倒れた人々対して本当に心からの追悼の意を表し、今後は遺族の為の遺骨収集でなく、私達後世に生きている者の務めとして「やすくは（靖國）の心」をもって遺骨収集にあたりたいと思います。

終わり

## 事務局からの報告等

### 一 平成30年度臨時理事会の開催

10月17日（水）、当協議会会議室において臨時理事会を開催しました。本会議では、事務局から提出された議案等について熱心な討議が行われた結果、事務局案はそれぞれ原案通り承認されました。

#### (一) 議案等

- 第一号議案…平成30年度上半期職務執行状況（報告）
- 第二号議案…平成30年度上半期予算執行状況（報告）
- 第三号議案…（規定の改正）
- 第四号議案…（顧問の選任）
- 第五号議案…（臨時評議員会の開催）

#### ○連絡事項

- (1) 臨時理事会（文書による決議）について

#### (二) 出席者

理事11名中9名、監事2名が参加

### 二 平成30年度臨時評議員会及び臨時理事会の開催

11月1日（木）、定款第27条（決議の省略）に基づき、評議員全員（11名）

から書面による同意をいただき、國澤輝生氏を理事に選任しました。

また、同日理事全員から書面による同意をいただき、圓藤春喜氏の専務理事からの退任を承認するとともに、伊藤隆事務局長を専務理事に、國澤輝生理事を事務局長に選任しました。

### 三 慰霊祭等への参加状況

#### ○67回特攻平和観音年次法要

9月23日、世田谷観音寺・特攻観音堂において執り行われ、伊藤理事が参列しました。

#### ○靖國神社秋季例大祭

10月18日、靖國神社例大祭に柚木理事長が参拝しました。

#### ○千鳥ヶ淵秋季慰霊祭

10月18日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において奉仕会主催の慰霊祭が執り行われ、当協議会から、柚木理事長他三名が参列しました。

#### ○全国ソロモン会慰霊祭

10月21日、靖國神社において執り行われた同会主催の慰霊祭に、柚木理事長が参列しました。

#### ○大東亜戦争戦歿全学徒慰霊祭

10月21日、靖國神社において執り行われた大東亜戦争戦歿全学徒慰霊祭に、國澤事務局員が参列しました。

#### ○ビルマ方面戦没者慰霊祭

11月3日、靖國神社において執り行われた全ビルマ会主催の慰霊祭に、伊藤専務理事が参列しました。

#### ○市ヶ谷台慰霊祭

11月6日、市ヶ谷駐屯地メモリアルゾーンにおいて偕行社主催の慰霊祭が執り行われ、柚木理事長が参列しました。

#### ○慶應義塾戦没塾員追悼会

11月10日、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて、慶應義塾戦没塾員追悼会が執り行われ國澤事務局長が参列しました。

### 四 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

今年度第2回派遣（9月25日～10月10日）に、当協議会から2名の参加を予定していたところ、火山活動の活発化により中止となりました。また、第3回派遣（11月28日～12月12日）にはつばさ会から推薦をいただいた2名が参加されました。劣悪な環境下での作業本当にお疲れ様でした。

なお、1月29日～2月13日に第4回派遣が計画されています。

### 五

#### 新入会員紹介（敬称略）

（平成30年8月1日～11月30日）

### 六 寄付金の税額控除に係る領収書等の送付について

【賛助会員】 釣部 人裕

当協議会は、租税特別措置法に基づく税額控除対象法人に認定されており、

従来、5000円以上の年会費・寄附金を頂いている方に領収書及び証明書（写し）を送付しておりますが、本年度も同様の処置をさせていただきます。

また、5000円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書（写し）をご希望の方は、遠慮なく電話等で事務局までお申し出下さい。

#### 寄稿のお願い

当協議会は、広報誌「慰霊」を、年3回（1月、4月、9月）発行しています。

各団体及び会員の皆様の積極的なご寄稿をお願い申し上げます。

原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。関連の写真等がありましたら努めて添付をお願いします。

### 当協議会員入会の案内

当協議会は、民間有志の会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う多くの皆様の、当協議会会員の加入を心からお待ち申し上げます。

既加入会員の皆様には、お知り合いの方の新規入会勧誘に、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。会員の区分と年会費は、次のとおりです。

#### 一 賛助会員

（本会の趣旨に賛同する個人）  
年会費 三〇〇〇円

#### 二 賛助特別会員

（特別御芳志の賛助会員）  
年会費 五〇〇〇円

#### 三 正会員

（本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体）  
年会費 一〇〇〇〇円

#### 四 特別会員

（本会の趣旨に賛同する企業・法人団体）  
年会費 一口 一〇〇〇〇円（一口以上）

※振込先口座番号（郵便振替口座）

〇〇一四〇・六・二三三九三〇